

随想 ずいそう



厳しさと優しさ

松本春帆



ている。反面、若さをぶつつけ、ともに汗を流し、仲間を大切にしてきたように思われてならない。ところで現実には、多くの学校で様々な問題をかかえて苦しんでいるし、思いやりなどの暖かさに欠ける面が強く出ているのは誠に残念である。

こうした問題の要因については、臨教審の第二次答申の中でも最初に、「子どもたちの心の荒廃をもたらした原因と責任は、その最も根深いところで大入社会全体にある」と述べているところであるが、誠に同感であり、私たち大人一人一人が、自らを厳しくみつめてみる必要がある。

過日、丁度三十年前に中学校を卒業した教え子の同級会があった。話した花が咲き 友だちにいじめられたこと（今のように陰湿でない）や先生に一對一でやってみると相撲を取らされたことなど、その思い出は三十年前にさかのぼって、いつ果てるともなく続いた。そして彼等は現在中学生や高校生の親であり、社会の第一線で活躍している者たちである。

今、家庭や社会の教育力が問われている時、三十年前の彼等との取り組みを思い、未熟な若年教師で満足な指導もできなかつたなど、自責の念にかられ

例えば今の子どもは自己中心的であるとされるが、大人の中にもよくまあ、自分に都合のよい理屈を言うもんだなあど驚くことさえある。二、三年前の毎日新聞の余録の欄に、藤本義一氏の言葉として、「日本人の心のゆとり」のなさは、人の後ろ指を指すのは平気、自分の後ろ指を指されるのは嫌という後ろ指志向が原因である」ということがのついていたが、大人の勝手をあらわしたものであろう。

また「本音で議論しよう」「本音を聞きたい」とよく言うが、とかく本音

は建前のまえに一蹴しゅうされることが多い。本音や建前の意味づけは別として、土居健郎氏は「建前と本音がともに作動しないと、人間関係がギクシャクしたものになる」と言っているように本音を踏まえた建前で論じてほしいと思う。そして臨教審答申にもある、教育環境の人間化の観点に立った教育諸条件の整備とともに、大人自身が正義を愛し不正を憎む強い心を持つと同時に、人間が人間である限り、誤りと弱さがあることを自覚し、正義の名の下に人間の思いやりや優しさを切り捨てることがないようにしなければならぬと思っている。

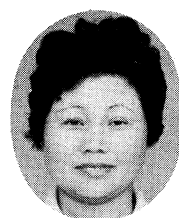
本校では五十五年以来研究の一端を自主公開しているが、その理由の一つは、人間は弱さを持つているから、多くの人々から厳しい批判をいただくなど、適当なところで妥協し、もう一歩の研究にふみこめないのを戒めたことにある。これからも職員一同謙虚にそして厳しく、お互いに戒めあい、そして痛みを分かち合いながら、「生き生きと学習にひと組む生徒」の育成をめざし、同行の途を歩んでいきたいと思っている。

(白河市立白河第一中学校長)



遊びの中で

菅野 久瀬子



「先生、おはようございます」

「おはよう、元気がいいね」

せつせと登園してくる子どもたちの姿からは、

「きょうこそはー」

「あれもやってみたいな。これもやってみたいな」

という意気込みが一人一人の胸の中に秘められているのを感じます。今日も新しい一日がスタートしようとしていきます。

「先生、もう裸になつたよ」

「魔法の手袋もかけたよ」

という子どもたちの声から、友だちと仲よく遊ぶんだという響きが伝わってきます。

みんな魔法の手袋（乾布摩擦のたぬの軍手）をかけ、友だちの背中を二、三、……と力をこめてこする元気な声、そのときの子どもの同士の対話は